

墨書は『古今和歌集』収録の一首に該当する可能性が高いことが判明

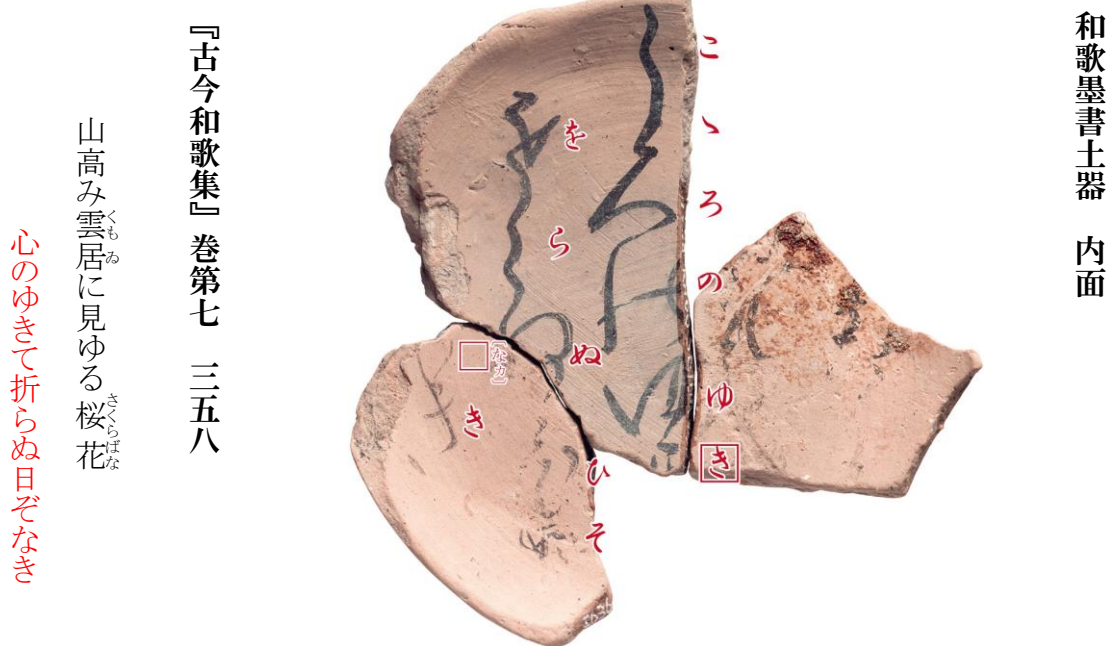
— 京都大学病院東構内出土の和歌墨書土器について —

概要

京都大学大学院文学研究科附属文化遺産学・人文知連携センターの京大文化遺産調査活用部門には、12世紀はじめごろの墨書土器が所蔵されています。同大学医学部附属病院東構内南東辺（聖護院川原町遺跡）の発掘調査によって出土したものです。口径約9cmの土師器小皿で、内外面に墨書が認められます。

このほど、京都大学大学院文学研究科 吉井秀夫 教授（考古学）、吉川真司 同教授（日本史学）、金光桂子 同教授（国文学）、上記のセンター 千葉豊 准教授（考古学）、笹川尚紀 同助教（日本史学）の研究グループが、赤外線機器を用いるなどして改めて検討を行ったところ、内面の墨書は、最初の勅撰集である『古今和歌集』に収録されている一首に該当する可能性が高い、という点が明らかになりました。これによって、平安時代後期の和歌文化の様相について考えるうえで、重要な素材を提供しえたといえます。

今後は、この和歌墨書土器が出土した遺跡の性格や和歌が土師器にしたためられた理由などに関して、国文学・考古学・日本史学といった各方面から、多角的に分析を進めていきたいと考えています。



1. 背景

平成12年（2000）に、京都大学医学部附属病院東構内南東辺（聖護院川原町遺跡、現在の地下駐車場地点）を発掘調査したところ、1基の井戸跡から、墨書のある土器がみつかりました。12世紀はじめごろに作られた土師器小皿の破片で、内側と外側に墨書がみうけられます。一見して多くのひらがなが書かれているのがわかるのですが、これまで釈読が進んでいませんでした。そこで、京都大学大学院文学研究科附属文化遺産

学・人文知連携センターの京大文化遺産調査活用部門における共同研究として、国文学・考古学・日本史学の関係教員による検討を続けてきました。

2. 研究手法・成果

墨書土器は3片ありました。まずは、それらが接合するのかが再検討しました。その結果、3片は接合すること、すなわち同一個体であるのがおさえられました。つづいて、墨書の判読にとりかかったのですが、いくつかの文字は、墨の薄さなどにより、はっきりとはみえませんでした。そこで、奈良文化財研究所のご協力をえて、赤外線機器も用いることで、墨書の確定に努めました。その後、研究会を行うことで、以下のような事実が明らかになりました。

内面の墨書は、『古今和歌集』に収められている一首に相当する蓋然性が高い、という点がわかりました。『古今和歌集』は、10世紀初頭に編纂された最初の勅撰和歌集です。「こゝろのゆき^き／をらぬひそ^(なみ)き」は、『古今和歌集』巻第7の358番歌、^{おおしこうちのみつね}凡河内躬恒作の「山^{くもみ}高み雲居に見ゆる桜^{さくら}花心のゆきて折らぬ日ぞなき」の下句「心のゆきて折らぬ日ぞなき」に一致します。上の句は明確ではないのですが、下の句はいろいろな和歌に用いるのには、あまり一般的な表現ではないと考えられます。したがって、358番歌にあたる可能性はかなり高いと判断されます。

古代の和歌墨書土器は、学問の初心者が手習いの手本にしたとされる難波津の歌を除くと、各地の遺跡から7点みつかっています。それらは9・10世紀、すなわち平安時代前・中期のものです。このたびの和歌墨書土器の作製時期は、12世紀初頭ごろに比定され、平安時代後期のものがはじめて確認された、という点でも、その重要性を指摘することができます。

3. 波及効果、今後の予定

『古今和歌集』は、後世の作歌に大きな影響をおよぼしました。この和歌墨書土器は、その点をくみとれる資料として評価することができます。くわえて、平安時代後期における和歌文化の有様を考えるうえで、貴重な素材を提示しえたといえます。この和歌墨書土器の出現がきっかけとなって、各地から平安時代後期のものがみつかることを大いに期待いたします。

和歌墨書土器が出土した地点は、白河の北部に位置します。白河は、院御所や六^{りくしょうじ}勝寺が設けられるなど、12世紀には政治的・宗教的・文化的にとっても重要な地域でありました。この和歌墨書土器がみつかった辺りには、皇族や貴族などの身分・地位の高い人の邸宅が所在していた可能性が考えられます。

今後は、土器に和歌がしたためられた理由、遺跡や遺構ならびに和歌墨書土器とともに出土した遺物の性格などについて、国文学・考古学・日本史学の各分野から、引き続いて総合的に検討を行っていく所存です。また、折をみて、この和歌墨書土器の展示を実施し、さまざまな分野の研究者のみならず、一般の方々にも、その重要性について広く知っていただければと思っています。

4. 研究プロジェクトについて

本研究は、以下の施設の共同研究で行われました。

京都大学大学院文学研究科附属文化遺産学・人文知連携センター 京大文化遺産調査活用部門

京都大学大学院文学研究科 教授 吉井秀夫（上記のセンター長）

同	教授	吉川真司（上記のセンター 文化遺産学研究施設長）
同	教授	金光桂子
上記のセンター・部門	准教授	千葉豊
同	助教	笹川尚紀

<研究者のコメント>

和歌が墨で書かれている日本古代の土器は、難波津の歌のものを除くと、全国各地から7点しかみつかりません。そのようななかで、最初の勅撰集であり、かつ後世の詠歌に大きな影響を与えた『古今和歌集』のなかの一首がしたためられている蓋然性が高い、という点は、貴重であるといえます。よって、それを墨書した意味について検討していくことは不可欠であると考えます。